

## 文安五年相良家政変の実像

鶴嶋, 俊彦  
熊本城調査研究センター文化財保護課 : 主幹

<https://doi.org/10.15017/1513713>

---

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.66-74, 2015-03-31.  
九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室  
バージョン :  
権利関係 :

# 文安五年相良家政変の実像

鶴嶋 俊彦

## 一 小論の目的

相良家の歴史で最大の謎は、有力庶家永富氏による相良本宗家の篡奪である。西暦一四四八年、文安五年とされる永富長統による人吉相良家の家督相続は、惣領家多良木相良家の滅亡と球磨郡の統一に発展した。長統の勢力は郡外の芦北・八代に及んで、長統の血脈は戦国大名化の道を切り拓くことになった。長統の娘は上村直頼の室となっていたが、嫡子為統の第三子頼廉は上村直頼の養子となっていて、その孫為清は相良家の養子となつて十六代晴廣となり、その血統が近世大名相良氏へと連続した。このことは相良家の家史編纂の実態を考える上で極めて重要である。

長統が政権を奪取するまでの半世紀の間、『相良家文書』の文書数は四点しかなく、前後するどの半世紀と比較しても極端に少ない。このことに着目した服部英雄氏は、「そこに「消された歴史」を感じるのは人の常であろう」と「相良正史」の記述を疑い、長統による文書の整理・廃棄があつたことを想定したうえで、島津氏など周辺の各家に残された文書・記録を使用して戦国相良氏の誕生に至る過程をダイナミックに描いた<sup>1)</sup>。

相良家の「正史」とは、近世後期の編纂になる『歴代嗣誠独集覧』『南藤蔓綿録』『求麻外史』などの編纂書を指す。この「正史」には文安五年の政変に関する同時代史料の引用はなく、最も古い相良家の史書である天文五年の「沙弥洞然長状」にも政変は記述されていない。政変に至る一連の事件は、江戸時代に成立した相良家の家史において初めて記述されるものである。小論では永富長統が政変によつ

て惣領権を獲得するに至る一連の事件を「文安五年相良家政変」と仮称し、べールに包まれた時代を「正史」以外の史料によつて再検証を試みる。

## 二 相良家の家史「正史」にみる文安五年の政変

最初に近世後期の編纂になる『歴代嗣誠独集覧』『南藤蔓綿録』『求麻外史』といった相良家の家史に著されている「文安五年相良家政変」前後の情勢を概観しておこう。

応永十一年（二四〇四）山田家第七代永富頼連が山田大王社建立。

応永十五年（二四〇八）山田毘沙門堂再興、（實長が）親の前頼の牌所立興

寺草創。

応永十八年（二四一一）山田城主八代ノ孫永留實重嫡子藤五郎丸長重誕生、

後の長統。

応永二十四年（二四一七）人吉の相良實長逝去、後継前統（初め周頼、また藤五郎と称す）。

応永三十一年（二四二四）薩摩国山門郷（山門院）御知行（文安五年に嶋

津家押領）。

応永三十二年（二四二五）七月十二日、長統の親實重逝去。山田堂蘭増大

寺牌所長統家督。

正長元年（一四二八）二月二十四日、多良木家六代ノ城主相良頼久逝去。

黒肥地蓮花寺牌所。

永享五年（一四三三）第十代堯頼（童名虎寿丸）誕生。実母は嶋津八代久豊（忠国）の妹。

永享年中 長統は従五位下左近将監を叙任。

嘉吉元年（一四四一）前統公夫人の平産祈願に漆田王門前神社創建。実底和尚が永国寺を建立。

嘉吉三年（一四四三）六月二十六日、相良前統逝去。牌所永国寺。廟所不明。虎寿丸十一歳で家督。

文安三年（一四四六）人吉木山天満宮再興。

文安四年（一四四七）十二代となる為統、山田城に誕生。永留四郎三郎頼元と称す。

多良木家八代ノ孫頼観・頼仙、十月下旬に人吉に押寄せ謀反の企て。謀反の張本人は西浦外越地頭の桑原一家。

頼観は青蓮寺御堂ノ北の内に在住し多良木・久米・湯前・湯山・岩野まで支配。

文安五年（一四四八）二月下旬、桑原一家の案内で頼観・頼仙を大将に森田・

嶋村・赤川・留田・新堀・原口・源島・大石・平田・横瀬の一族、その他蓮花寺・東明寺・弥勒寺・宗覚寺・玉林庵・大正院・山伏惣テ・安養院・本蓮坊等の寺家山伏、歩士武者五百余人に雑兵を合わせた多良木家軍勢七百余人が人吉に押寄せ。堯頼、近習・御家人僅かを供に菱刈に立ち退き人吉落城、頼観・頼仙が登城。山田ノ城主永留長統、山田勢と与力で人吉城攻め、頼観は敗軍し多良木に退去。

三月二十八日、菱刈山野にいる堯頼、長統に在城（家督）を勧め、自身は牛に突かれ逝去。

八月三日、長統勢の永留長連を惣大将に山田主計允・井福彦十郎・村山

助五郎・万江采女正・藤井助四郎、徳永右馬助・同太郎九郎・峯山逸角

らに雑兵を入れた七百余の人吉を出立し多良木に向け発向。久米城の放火を見て頼観・頼仙勢が出馬し、久米雀ヶ森合戦にて残らず追討。青蓮寺御堂の前で首実検回向。同寺の椿塚彼らの墳墓（「相良撰津守殿塚」）

\* 「長統公御代ヨリ始メテ求麻一郡人吉ヨリ御支配也」

宝徳元年（一四四九）八月十一日、西浦地頭桑原隠岐守一族其外残らず誅伐。「矢黒城戸尾合戦」。

宝徳三年（一四五二）三月七日、斉木但馬逆心により赤池籠城し、長統が誅伐し滅亡する。

長祿元年（一四五七）橋本某を井野木田山に追伐する。

長祿四年（一四六〇）永国寺再興

文明三年（一四七二）堯頼実母生円院殿（嶋津八代久豊（忠国）の妹）観音寺に逝去。

以上のように、「正史」では文安五年の二月下旬に多良木の相良頼観が人吉の相良堯頼を攻めたて、堯頼は菱刈に逃亡し、人吉に隣接する山田の永富長統の兵が人吉城を急襲したことで頼観は多良木に退去した。そして三月二十八日に堯頼が逃亡先の菱刈で事故死したことから、功績の大きかった長統が五月十三日、人吉城に入城して人吉相良家を継いだ。その後、長統は多良木に進軍し頼観・頼仙兄弟を討ち、また、多良木方に与同した人吉周辺の国人衆を誅伐し球磨郡を統一したというストーリーとなっている。

### 三 文安五年相良家政変に関する研究史

こうした相良家の「正史」が語る長統の相良家継承に対して異を唱える者は永く不在だった。このタブーとも言える定説のドアを最初にこじ開けたのは服部英雄氏で

あった。服部氏は「大童重国軍忠状案」や岡本氏系図を用いて球磨郡の国人の推移を考察するなかで、「文安五年（一四四八）年、永富相良氏、すなわち相良長統は下相良氏を追放、人吉宗家をのつとり、次いで上相良氏をも打倒し、一挙に求摩郡内を統一した」と長統の相良家相統を長統主導による内訌であったと結論し、また、同時に久米・平川・須恵・岡本・永里・小田など多くの国人が亡びたことを指摘した。<sup>2</sup> さらに続いて、相良正史が語る郡内統一を「篡奪者の弁」として一蹴して「文安内訌」と呼んで、「下相良家の分裂に端を發した文安内訌は球磨郡内を堯頼支持側の国人と永富長統支持側の国人に二分し、前者が否定された」とし、永富氏を「下相良一族内の庶子連合（一族一揆）の指導者」であり、「文安内訌はこの相良一族の関係を清算し、頂点を永富相良氏一元化するものであった。」と強調した。<sup>3</sup>

しかし、服部氏の研究成果はなかなか受け入れられなかった。種元勝弘氏による『人吉市史』は、<sup>4</sup> 「正史」の記述を無批判に踏襲したに過ぎず、「正史」に依拠した説明に始終したものだ。<sup>5</sup>

一方、『山江村史』<sup>6</sup>で著者菖蒲和弘氏は、「文安五年以来連々致忠節侯目安□文案」によつて「正史」を見直し、「四月に永富長統側は「薩摩瀬（桑原氏か）に對して先制攻撃を行い、人吉周辺を制圧、五月十三日に人吉入城している。そして、この月に永里之山城（上村）を攻め、七月十五日には永富側は水面ノ城（又は葦毛城・相良村）を攻撃して、小田丹後守を討ち取り、戦いを有利に進めている。」とし、「八月四日、永富長統は上相良の本拠地に迫り、古多良木・久米にて大決戦を行い、上相良氏を討ち取った。」と結論した。

また、柳田快明氏は「多良木頼観の侵攻によつて下相良氏惣領家が没落したとするのは誤りで、かなりの勢力を有した山田城城主永富長統によつて、下相良氏、ついで相良惣領家（上相良氏）が滅ばされ、家督を奪われたと考えられている。庶子家もしくは非血縁の国人領主が、地域の主家から権力を篡奪してその姓を名乗

り、さらにその宗家をも圧倒した下剋上であった」とした。<sup>6</sup> 服部氏の見解がここに至り、やつと受容されるようになった感がある。

#### 四 永富長統という人物

永富長統とはどんな経歴をもつ人物だろうか。しかし、これを教える史料も多くない。惣領家相良前頼と弟氏頼連署で「なかとミとの」に宛てられた「相良前頼同氏頼頼書連署契状」（『相良家文書』一七〇号文書）が永富氏を確認できる唯一の史料である。永富は後世の編纂物では永留とも漢字表記されが、鎌倉時代の史料にみられる人吉庄内の永富名の地頭とみられることから、本論では「永富」と表記して論を進める。永富長統の血脈を『南藤蔓綿録』の系図に見ると、相良家第二代頼親の嫡子頼明から八世の孫となる實重の子とされている。「正史」にある人吉相良氏や多良木の相良氏の系図と並べると下記のようになる。

##### 【永富氏】

頼親―頼明―頼常―頼積―長滋―頼均―頼道―頼連―實重―長重（長續）  
―頼福

##### 【人吉相良氏】

長頼―頼親―頼俊―長氏―頼廣―定頼―前頼―實長―前統―堯頼\*長續―  
為續

##### 【多良木相良氏】

頼景―長頼―頼氏―頼宗―経頼―頼仲―頼忠―頼久―頼観\*断絶

人吉相良氏の系図では長頼の嫡子は頼親とされているが、長頼三男とされる頼俊がすぐに継ぐことになったという。しかし、頼親という人物は一次史料では確認できない。後に本宗家を奪取する永富氏が、その正当性を示すために創造した「正史」上の登場人物という意見が強い。<sup>8</sup> その頼親嫡男の頼明は、山田家の祖となり山田村

領主となり永富姓を名乗るといふ。

応永十八年（一四二一）、永富實重を父に長統が「山田城」に生まれる。初め藤五郎長重を名乗った。實重夫人は相良頼廣の娘とされているが、頼廣は十四世紀半ばに活躍した人物で、正平年間の初め（一三五〇年頃）に逝去したことになる。長統は応仁二年（一四六八）、京都出陣から帰郷後に五十八歳で逝去し人吉永国寺に埋葬されているので、母が八十歳頃に出産したことになり不自然である。長統と年齢的に同時代人とみられるのは、人吉相良氏では實長か前統であり、多良木相良氏では頼久か頼観あたりである。永富流の祖頼親から長統の父とされる實重まで、同時代史料で確認できる人物はいないが、文安五年の政変で下相良氏の惣領権継承の資格を有していたことを勘案すると、本宗家の實長の名字の一字を用いる父の實重や長重（長統）は血縁関係者であった可能性が考えられる。實重あるいは長重は、本宗家から山田（永富）家に養子として入っていた可能性もある。長統を名乗るのは本宗家を継承した後、前統の名から一字を採ったのであろう。長統には四人の男子があった。長男は頼金といい、次男は早世し、三男が為統、四男を頼泰といふ。頼金は病弱のため三男が為統が継ぐことになった。

## 五 一次史料等を中心に考える長統時代

応永く文安に至る約五十年間の古文書は四点で極端に少なく、当然ながら文安五年政変を証明できる史料は皆無である。服部氏が指摘したように、長統による相良家継承に不都合な文書は廃棄されたと考えられることは妥当であろう。しかし、関係文書が皆無というわけではない。廃棄から免れ伝来した関連史料から長統による「文安五年相良家政変」の実像を探索してみよう。

【史料1】「相良立阿前頼契状」『相良家文書』一八六号

契約申候、右之意趣者於多良木競望之事不可有候、此旨偽申候者、奉仰候、

阿蘇十二宮大明神之御罰ヲ、至子々孫々可罷蒙候也、

元中八年二月十八日

立阿（花押）

相良孫五郎殿

元中八年（一三九一）、立阿（人吉相良氏の前頼）が多良木の支配を競望しないことを相良孫五郎に契約した起請文である。孫五郎の実名は不明だが、菖蒲和弘氏は上相良氏に比定している。<sup>9</sup>南北朝に活躍する多良木相良惣領五代の経頼は孫三郎を名乗っていることを考えると、孫五郎は七代頼忠である可能性が考えられる。ともあれ、この不可侵条約によって人吉相良と多良木相良の和平が樹立し、外征の準備が整い、対外的な派兵に積極的に出陣できるようになる。「正史」では元元年（一三九四）に相良前頼兄弟が都城に出陣し「野之三谷城」で戦死している。実長が家督すると、応永三年・同四年には二度にわたる入来院合戦に出陣し渋谷重頼を支援する。また、応永八年の「鶴田合戦」では島津伊久方となり、島津元久方と敵対し、応永二十一年には「喜入合戦」で島津久豊を支援した。同二十四年の前統家督後も、同二十六年の「山田永利合戦」、そして同二十九年の「山門院合戦」に参陣し、遂に相良氏は山門院三五〇町を知行することに成功し、以後文安五年までの二十五年間知行し続けた。こうした応永年間に集中し長期にわたった相良氏の対外派兵は、球磨郡内での無為・平和の実現・維持がなくては実現できなかつたはずである。

【史料2】「相良為續置文」『願成寺文書』一六号（『熊本県史料』三）

（願成寺江参）

肥後國求麻郡久米郷多良木村之内當家先祖長頼法名蓮佛彼御方御寄進願成寺之田地、三四代目自多良木致押領候、然者多良木之事、近江守前續令退治之時、願成寺江如本文書被至寄進候、其以後前續・卓司堯頼依無子孫、多良木遠江守頼久令蜂起、郡内之人々過半属彼手候處、當家如順次、親候長續當郡知行之時、裏里之人依忠節、先彼領地被宛行給分候歟、今年如前代、

彼三町願成寺并供僧様之御中江付進之候、坪付在別紙如前代御知行、可目出候、當家於御祈念者弥奉憑候、京都國役等、又者弓矢向可隙入時節者、如諸寺家御心得可然候、仍所定如件、

文明十九年丁未七月十日 左衛門尉藤原朝臣為續(花押)

当文書は、文明十九年(一四八七)に為続が人吉の菩提寺願成寺に多良木の田地三町の寄進を約束した文書である。文意は次のとおり。

多良木の田地は相良家先祖の長頼が願成寺に寄進していたのだが、それから三・四代後の時代には多良木相良に横領されていた。前続が多良木を退治した時、願成寺に元のように寄進した。しかし、前続や堯頼には相続すべき子がなかったため、多良木の相良頼久が蜂起し球磨郡内の過半の武家が頼久に属する事態となった。だが、「當家如順次」によって親の長続が相良家を継いで球磨郡を知行することになった。頼久退治は郡内隅々の武士たちの働きによるもので、先ずその恩賞として彼の願成寺の寺領も宛がわれてしまった。しかし今、以前のように彼の三町を願成寺とその供僧に寄進することになった。その場所を書いた坪付けは別紙にあるとおりだ。前代のように三度も知行されたことは慶事である。相良家繁栄の祈念については一層念入りにたのむもので、京都国役や戦に参陣する際は傘下の寺家にも同じように祈念をお願いする。よって以上のように約束する。

この文書によると、次のような事件・事項の存在が知られる。

- ①多良木の田地は人吉相良家の始祖である長頼が親父頼景の逝去によって多良木を相続していた時代に願成寺に寄進されていた。
- ②それから三・四代後にその田地は多良木相良氏に横領されていた。
- ③人吉の相良前続が多良木相良氏を退治して、その田地は元のように願成寺に寄進された。
- ④しかし、前続・堯頼に孫子がなかったため、それを好機に多良木の相良頼久が蜂起し、郡内の過半も頼久に属するといった事態となった。

⑤この混乱の中、「當家如順次」、すなわち惣領継承権の順次から為続の親である永富長續が當郡を知行することになった。

⑥彼の田地は、長続を支持し忠節を尽くした球磨郡の武士たちへの恩賞となっていたので、今、改めて願成寺に寄進する。

①の長頼による多良木田地の寄進は、頼景の長子である長頼が多良木の相続をしている事実から肯定できる。②の三・四代後とは、多良木相良氏では経頼や頼仲の頃となり、南北朝内乱の最中でもあり、願成寺田地の横領は当然あったと想像できる。③の前続による多良木退治は「正史」に全く出てこない新証言で「正史」では抹殺されている。そして④では、多良木蜂起の張本人を頼久とする。この蜂起を「正史」では頼久の子である頼観・頼仙のことになっているが、二人の名は出てこない。⑤では永富長続が「當家如順次」によって球磨郡を知行したといい、長続が相良家惣領、すなわち前続及び堯頼の跡の順当で正当な継承権を有する血筋の者であったと証言している。⑥は、上記の惣領継承が郡内隅々の武士たちにも問題なく指示され、長続に忠節を尽くした武士たちに恩賞を用意する必要があった。その時、本来願成寺の寺領で横領されていた多良木の田地も武士たちへの恩賞となってしまう。そこで今(文明十九年)、改めて願成寺への寄進を約束する、という内容である。

⑥が謂わば当文書の主文で、①から⑤は、三度目という寄進に至る経緯を説明した前文であるが、江戸時代に成立した「正史」と異なり、文安五年の政変前となる前続の時代(応永二十四〜嘉吉三)には人吉相良氏の前続によって多良木相良氏の退治があり、多良木支配が始まり、相良家の惣領権もまた人吉相良氏に確定されていたことを当文書は証言していることは重要である。そして、自分の親の長続を「當家如順次」の人物、すなわち相良家を継承するに相応しい正しい血筋の人物だったことを強調する。

当文書は、焚書にも遭遇せず願成寺の寺領関係文書という性格から伝来したもののだが、政変から三十九年後の文書であり、正確には同時代文書ではない。「當家

如順次」の具体的な点も明らかにしていないように、永富氏による惣領相続を当然のこととした上で書かれている。相良家「正史」と違って、多良木相良家六代頼久が正長元年（一四二八）には逝去しておらず、堯頼の時代まで多良木家の当主として生存していることや、政変時の多良木相良の当主として登場する頼観やその舎弟頼仙の名も見えないことは、史実に近いことを示唆しているように思える。

【史料3】「第十一代」『御当家聞書』（抄出）

蓮仏公ノ御親父四郎頼景公ヨリ第八世頼観・頼仙之御代ニ至テ、文安五年戊辰上相良多良木ノ一姓悉ク断滅スル也、頼観・頼仙之御父遠江守頼久ハ、其先キ去ル子細有テ、肥地岡・鍋倉・古多良木・此等御供ニテ、五木通り御越国中ヲ御立退候由シ、又夕窪田・岩崎・新堀・井口・乙益・黒肥地・此レ等モ此ノ一乱已然去ル子細有テ、当所ヲ立退キ須惠ニ被參候由、凡ソ蓮仏公ヨリ十一代左近将監長統公ニ至テ、初テ求麻ヲ一郡不殘人吉ヨリ御支配也、但シ其以前ハ久米・多良木・湯前・江代・湯山ハ頼景公御代ヨリ頼観・頼仙迄御支配也、

『御当家聞書』は江戸時代の相良藩士浪岡市郎右衛門季卓の著作で、相良氏の初代から頼峯公の寛延二年までの聞書を中心とした叙述となっている。頼観や頼仙による内乱が登場する点など「正史」と共通するが、多良木の頼久が仔細から家臣を連れて五木經由で国中に立ち退いたことは「正史」には見えない。ただし、頼久の立退きは政変以前とだけしかなく具体的な年代は不明である。この時、肥地岡・鍋倉・古多良木の武士たちは頼久に同行して国中に向かうが、窪田・岩崎・新堀・井口・乙益・黒肥地の武士たちは須惠に退出していて、多良木相良氏の家臣団が二分されたことを示していると考えられる。この頼久の退出が、史料2にある前統による多良木退治のことであろう。

【史料4】人吉市立図書館蔵『探源記』巻一（抄出）

扱又、御父遠江守頼久ハ、肥地岡・鍋倉・古多良木、此等之者共御供にて五

木通を罷成、国中へ御逃也、蓮仏公御父四郎頼景より第八代目左衛門尉頼親之御代、文安五戊辰年上相良多良木之一姓悉御滅亡也、小名字 窪田 岩崎 新堀 井口 黒肥地 乙益 此等者今度之一乱已前、去子細ありて頼親に不足を申、多良木を退出して須惠へ居候、故に今相殘候、蓮仏公方第十一代目左近将監長統御代に、始而求麻一郡不殘人吉よりの御支配なり、此時迄ハ久米・多良木・湯前・江代・湯山ハ頼景より此かた多良木殿御支配也、

『探源記』は、相良家の事績を中心に江戸時代に書き足されながら成立した記録。著者未詳で、相良家や渋谷家、林田家の写本が知られる。人吉市図書館が所蔵するものは相良家本である。

この記録でも史料3と大同小異の内容となっていて、①多良木の相良頼久は肥地岡・鍋倉・古多良木の諸氏を共に五木を経て国中に立退いたことや、②子細あつて頼観に不満の窪田・岩崎・新堀・井口・乙益・黒肥地の諸氏は政変の前に須惠に立退き、そのため政変後も家が連続できたことを記す。

【史料5】「黒肥地家系図」（抄出）

（黒肥地家八代頼國の註部分）  
黒肥地元祖空源有心居士美濃  
文安五年八月戦合砌リ五木通りニテ頼久孫子召テ同並三頼久河地味岡鍋倉古多良木一家召連逃ル  
為續公代  
文明十九年丁未年七月七日 水田六町三反畠四町七反 合拾耆町 為續公ヨ

リ御拝領之判形紙有之

本系図は人吉市黒肥地家が所蔵するもので、正空源有心居士とは黒肥地家第八代の頼國のことである。文安五年の合戦では、頼久及びその孫子、並びに河地・味岡・鍋倉・古多良木といった一家も逃亡したと記すように、史料3や史料4と同様な記事を載せている。また、文明十九年七月七日付けの為統の知行宛行の書状があるこ

とを記す。この宛行状の日付は、史料2の為續置文の二日前であり、この時多良木周辺の知行再編が集中的に行われたことを示唆する。

なお、同系図での頼久の箇所には法名を源蓮とし、註には「文安年中山口二居住」とあつて、文安五年の政変後は山口にいたとする。また、後継の頼観の下には異筆で「嫡子鬼丸相良武任遠江守」と追記され「筑前國領ス」とし、頼観の嫡子鬼丸が成長し大内家臣相良武任となったとする。なお、『求麻外史』では「頼観の子鬼太郎出でて周防に奔り、大内氏に寓す、蓋し大内義興の臣相良正任なるもの是なり」とする。

【史料6】青蓮寺棟札・天文十一年棟札の裏面追記（抄出）<sup>(12)</sup>

造立永仁三年乙未也、其後嘉吉三年癸亥再興アリ、造立ヨリ百四十九年也、

當檀那藤原席壽丸

院主弘慶

永仁元年（一二九三）、多良木相良氏の頼氏は所領を長男頼宗に譲り、頼宗は永仁三年に阿弥陀如来三尊の木像を造立して初代頼景の廟所の上に阿弥陀堂を建立した。この像と堂が現在重要文化財となっている「木造阿弥陀如来及び両脇侍立像」と「青蓮寺阿弥陀堂」で、寺名は頼景の妻の青蓮尼に由来する。

本史料は、天文十一年の青蓮寺阿弥陀堂再興の棟札の裏面にあり、元禄二年の修理の際に棟札に追記された文面である。嘉吉三年（一四四三）に青蓮寺の檀那である藤原席（虎）壽丸とその院主である弘慶が同寺の阿弥陀堂を再興したことを記す。

嘉吉三年は前統の逝去年であり、嫡子虎壽丸（堯頼）がその菩提供養を目的に再興し、併せて惣領相統後の最初の務めとして初代惣領である頼景の菩提も兼ねて退転していた阿弥陀堂を再建したのであろう。青蓮寺の住職は嘉吉の再興以前は不明で、当棟札に見える弘慶から真言宗僧侶が連続するが、棟札への追記は、寺に残っていた何らかの史料を基に追記されたと考えられる。二次史料ながら、史料2の「為

續置文」にある前統の多良木退治とも矛盾せず、文安五年の政変以前に前統や堯頼が多良木を確実に支配していたことの傍証となる史料である。

次の史料7は長統や為統の配下で活躍した犬童重国の文安五年の薩摩瀬合戦から文明九年の高田城救援までの歴戦の記録「文安五年以来連々致忠節侯目安□文案」（以下、「犬童重国軍忠状案」と略す）である。『南藤蔓綿録』では「犬童美作守重国伝記」として引用されている史料で、重国の子孫となる山江村山田の犬童家に伝わる。文明九年以降に恩賞を目的にまとめられた記録とみられ、同時代のものと考えてよい。残念ながら料紙の上部の一部を欠失するが、冒頭の文安五年の政変に関係する部分についてのみ以下に挙げる。

【史料7】「犬童重国忠状案」<sup>(13)</sup>

文安五年以来連々致忠節侯目安□文案

文安五年之四月、於当郡薩麻瀬村上

以来連々抽軍忠次第

（一、文安五年）

山田主計允・井福彦十郎・萬江采女正・藤井助四郎・徳永右京助・同太郎九良、彼等於中尾先登仕候之事、

一、同五月、北原左京助欲惣領貴兼之代畢教多之軍兵寄二来上村之城一候

時分、於峯崎防矢仕候之事、

一、同七月十五日、於水面ノ城三寄二會牧四郎左衛門尉ト一、討二捕小田但

馬一候之時、被レ疵候之叟、口牢疵、

この思量によつて文安五年に以下の合戦があつたことが判明する。

①文安五年（一四四八）四月、薩摩瀬村で合戦があつた。

②（同年）五月、人吉勢の犬童重国らが永里の山城を攻撃。山田主計允・井

福彦十郎・萬江采女正・藤井助四郎・徳永右京助・同太郎九良らが参陣した。

③（同年）五月、真幸の北原左京助軍勢が上村之城に寄せ来て峯崎にて防戦した。

④（同年）七月十五日、水面ノ城に牧四郎左衛門と寄せ合い、小田但馬を討ち取った。

冒頭前文にある①には文安五年四月に人吉薩摩瀬村での合戦があったことを記すが、合戦の詳細は不明。②は五月にあった重国らの人吉勢による永里城攻め。③は五月に真幸の北原左京助の軍勢が永里城に隣接する上村城に襲撃したため、人吉相良の一族上村氏の救援として犬童重国らが派遣されたことを記す。④も恐らく同年のことで、七月十五日に水面ノ城に牧四郎左衛門と寄せ合い、小田但馬を討ち取ったという内容である。

これらの合戦はいずれも「正史」には見られないという特徴がある。しかし、興味深いことに②の永里城合戦に参陣した武将は、「正史」にある頼観・頼仙らを討った「多良木討伐」に参陣した武将とほとんど重なっている。このことは「正史」が作成されるにあたって、「犬童重国軍忠状案」が参照されたことを示している。

## 六 政変後の永富流相良家の動向

政変後の状況をその他の史料によって概観する。宝徳三年（一四五二）四月、菊池為邦、相良殿に当知行の地を安堵している（『相良家文書』一九二号「菊池為邦安堵状」）。相良殿は長統であり、当知行していたのは球磨郡であろう。正式な相統ではなく強権的な所領獲得という経緯から安堵状が必要となつたのであろうか。早速長統は、翌宝徳四年に豊永殿に対して瓜生田・須恵庄竹下外の水田七町余を宛行っている（『相良家文書』一九三号「相良長統田地目録」）。豊永殿は政変の協力者で、史料②の「為統置文」に見える「裏里の忠節の人」の一人であろう。

長祿四年（一四六〇）、守護の菊池為邦が、相良左近将監長統に芦北郡を安堵し（『相良家文書』一九五号「菊池為邦安堵状」）、寛正六年（一四六五）には名和顕武から亡命援助と八代復帰の御礼として高田三五〇町を得て平山城（高田

城）を築いている（『求麻外史』）。

応仁元年（一四六七）、細川勝元方として長統が京都出陣することになり為統が家督を相続し、京都出陣の立願に人吉城内に愛宕山権現創建される。病気の為翌年正月に帰国した長統は三月二十五日に病死した（『南藤蔓綿録』）。

## 七 まとめ

江戸後期に肥後国相良家の事績を編纂した『歴代嗣誠独集覽』『南藤蔓綿録』『求麻外史』といった「正史」では、十五世紀中葉の文安五年（一四四八）に球磨郡山田領主の永富長統が人吉・多良木の両相良家の家督争いのなかで、相良家本宗の惣領を相続したとする。しかし、これを証明できる一次史料は無い。一方、『願成寺文書』には長統の活躍以前に人吉相良の前統によって多良木相良の「退治」があったことを載せた長統嫡子為統の文書があり、かつ、前統逝去の嘉吉三年（一四四三）には後継である虎壽丸（後の堯頼）が青蓮寺の御堂の再興を行っていたという史料がある。多良木相良氏の滅亡による相良家の統一は、「正史」とされる歴史とは大きく異なり、前統の段階に実現されていた可能性が指摘できる。『御当家聞書』や『探源記』、黒肥地家系図に見える頼久の国中退出は、前統による「多良木退治」によって惹起した結末ということになる。

しかし、文安五年の動乱がなかったということではない。永富長統の配下とみられる犬童重国は、同年に永里城を攻めたため、上村城を襲った北原勢撃退に奮戦し、水面ノ城の小田氏を討取っている。同年に大きな合戦があったことは事実で、この合戦の結果が永富長統の相良惣領家の継承に繋がっていることは確実である。

長統は「當家如順次」、すなわち統一相良氏の二代目堯頼の跡に相応しい正当な継承権をもった血筋を有する者とされたと推測できる。やはり永富氏の出自に文安五年相良家政変の核心となる謎が隠されているとみななければならぬ。

【祝辞にかえて】

二〇一三年十月二十日、熊本県球磨郡湯前町で開催の「浄心寺シンポジウム」のステージ。服部さんは浄心寺の創建者「浄心」を少式景資の代官の関係者ではなかったかという、誰も考え付かなかった案を提示した（『城泉寺シンポジウム記録集』湯前町 二〇一四）。会場にいたK氏が、「服部さんがまた爆弾を投下した」と唸った。

服部さんとは文化庁時代からの付き合いとなる。私が勤務した人吉市では国指定史跡人吉城跡の保存整備事業を進めており、指導監督に度々お出でいただいた。人吉庄は服部さんが大学生の時分、瑞祥寺という禅寺に長逗留して研究したファイルであった。服部さんが文化庁技官になりたての頃の初期論文「空から見た人吉庄・交通と新田開発」（『史學雑誌』八七編 史學會 一九七八）を読み、「こんな歴史学があるんだ」と衝撃を受けた。私はそれを刺激に「人吉庄の歴史的景観の復元」（『ひとよし歴史研究』創刊号 人吉市教育委員会 一九九七）をまとめた。これが研究者を自覚した私のスタートとなった。

服部さんの人吉庄への関心はその後も続いていた。時には「人吉庄起請田以下中分注進状」に出る「狩倉」調査のための聞き取り調査に同行したこともあった。聞き取りは、お土産持参で、時間をかけ膝詰めでどんな細かいことも相手に確認しメモを取られた。こうした研究スタイルは学問の師匠石井進氏のやり方だろう、とその時思った。『景観にさぐる中世』（新人物往来社 一九九五）、『河原ノ者・非人・秀吉』（山川図書出版 二〇一二）など、現在ある地名や景観、被差別民にも注がれる熱く鋭い眼差しが、一連の著作を生んでいる。

服部さんは大学の頃にワンダーフォーゲルをしていたと聞いたことがある。その関係か寸時を見つけて釣り糸を垂れるほど溪流釣りマニアで、何度か私も付き合った。私の長男が小六の夏休み、服部さんのお子さん二人を加えた男性五人で、川辺川支流の椎葉谷にヤマメ釣りのキャンプをしたことがある。テントの前で焚火をしなが

ら何を話したか覚えていないが、長男の伊吹君は中三なのに随分と大人びた口をきく子だった。朝方霧雨となったが、五人とも濡れながらぐつぐつと寝込んでいた。釣果はたいしたことなかったが、次男の沢雄君が川中から鹿が落とした角を拾い、狂喜乱舞して喜んでいた様子が目に浮かぶ。皆で溪流の崖を登る最中、先頭の沢雄君が蹴落してしまった石が服部さんの額を直撃し血が噴き出た。「大丈夫！」と釣りを強行したのは釣りへの執念ではなく子息への気遣いと感じた。長男の伊吹君は教員の免許を取ったが、お魚ネタで「芸人」をやっていることを服部さんのフェイスブックで知った。心配もあろうが、タフな生きざまに感心している親父のようにも見える。

息子は親父の背中を見て育つ。私も同じ背中を見ていたように思う。

参考・引用図書

- 『相良家文書』（東京帝国大学編『大日本古文書 家わけ第五 相良家文書之一』東京帝国大学文学部 史料編纂掛 一九一七）
- 科大學 史料編纂掛 一九一七）
- 「願成寺文書」（『熊本県史料』中世編第三 一九六三）
- 『求麻外史』（著者田代政嗣 訳者堂屋敷竹次郎 出版青潮社 一九七二）
- 『南藤曼綿録』（著者梅山無二軒 監修牛島盛光 校訂解題高田素次 出版青潮社 一九七七）
- 『歴代詞誠独集覽』（『相良村誌』相良村 一九九六）
- 『御当家聞書』人吉市歴史叢書第一巻（訳者益田啓三 校訂三村講介 人吉市教育委員会 二〇一四）
- ① 服部英雄「戦国相良氏の誕生」『日本歴史』第三八八号 吉川弘文館 一九八〇。
- ② 服部英雄「戦国相良氏の三郡支配」『史學雑誌』第八六編第九号 史學會 一九七七。
- ③ 前掲註1論文。
- ④ 種元勝弘外『人吉市史』人吉市 一九八一。
- ⑤ 菖蒲和弘『山江村史』歴史編（一）山江村 一九九八。
- ⑥ 柳田快明「II中世」『新トビックスで読む熊本の歴史』弦書房 二〇〇七。
- ⑦ 『相良家文書』六号文書「人吉庄起請田以下中分注進状」や『願成寺文書』7号文書「願成寺繪皮用途日記」（『熊本県史料』中世編第三 一九六三）に「永富名」が確認できる。
- ⑧ 柳田快明「永富（留）相良氏をめぐって」『山田城跡』II・III 熊本県教育委員会 一九九〇。
- ⑨ 前掲註5論文。
- ⑩ 鶴嶋俊彦「クマ陣と相良軍団」『ひとよし歴史研究』第七号 人吉市教育委員会 二〇〇四。

- (11) 「正史」の多良木相良系図に長頼の名はない。しかし、『相良家文書』第五号「関東下知状」によれば、頼景の死後、多良木村四箇村は蓮佛（長頼）の伝領されている。
- (12) 多良木町青蓮寺所蔵。
- (13) 掲載にあたり前掲註5論文の読下し文を参考にした。
- (14) 『熊本県史料』中世編第四 犬童文書追加（熊本県 一九六三）。

（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）